

2p

寛永諸家譜

清和源氏丁九冊之内
頼光流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (24)
函號	特 76 1



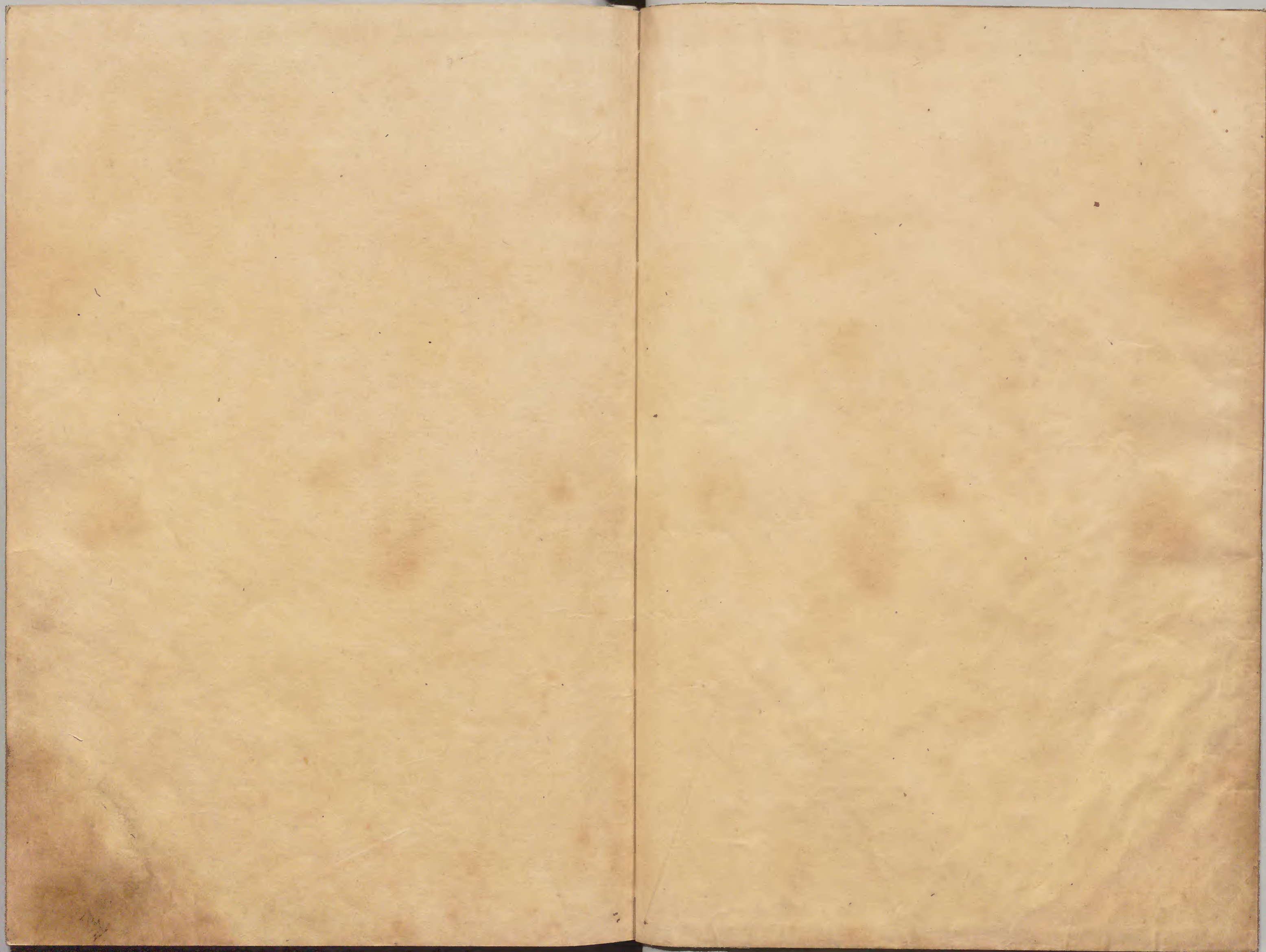
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





淺野

寛永諸家系圖傳

清和源氏

頼光流

淺野

丁二

淺草文庫

安藝守光晟松平の称号をりし

● 頼光

頼國

國房

光國

光信 あきのぶ

光基 あきのもと

光衡 あきのひら

光行 あきのゆき

土岐 とぎ 實朝の時 まねのとき 浅野判友 あしののりとも と と

光時 あきのとき

浅野次郎 あしののり 六条院判友代 むじのいのり 友代 ともしろ
あきのひら 捨北連仗 すけきたるい 左衛門尉 さむらひのむら

光清 あきのきよ

浅野右郎 あしののり

光房 あきのふさ

次郎 のり

光経 あきのつね

三郎 のり

光保 みつたけ

孫次郎

有光 ありみつ

彦六 ひこ

重光 むねみつ

五郎

影智 かげち

山法師 やまぼうし

光忠 みつただ

次郎

光盛 みつもり

三郎 みつら

國威 たけ

又三郎

良威 りやう

大貳房 だいにぶらう

山法師 やまわし

光隆 あきたか

三郎 さんらう

けり 教代中絶 すたいたち

光仲 あきなか

三郎五郎 さんらうごらう

光朝 あきあさ

八郎 あさの

光純 あきただ

八郎 あさの

正智 ちやり

檀律 えんりつ

山法師 やまぼうし

野意 のい

上座 じやうざ

山法師

長勝 ながかつ

又右衛門 またゑもん

生國尾列 なまくにひり

織田信長のら流たり長政又安井 おだののぶながのらながかつまたやすい

源氏と親類より安井も又源氏 みなもととせんとくよりやすいまたみなもと

なり長勝男子さか成二人のじよめ ながかつのこしちかさかふたりのよめ

を養ひて一女の妻吉子嫁一女の長 やしやひてひとめをよめよしこむかひとめをなが

政一嫁と長政ら夫と長むる まさひとめとながかつらむとながむる

て淺野氏を流しとら成さたる あさののうぢをながしとらなるとなる

信長の命あり妻吉子属 のぶながのいのちありむすめよしこぞとぞ

長政 ながかつ

初名ハ源氏 はつめのな

長勝ながかつら信長のぶなが（中）ついでて長政ながまさをらの氣
こなりそのうち一ひで後秀吉ひでよし先さきづけの大將たいしやうた
るふん時信長ときのお目めせありて長政
秀吉ひでよし小属せうじゆく一いち栲か列れつ備べい列れつ但馬たにま因いん備べい伯はく
者しやりて牧年ぼくねんの合戦くわせん一いち軍功ぐんこうありて
一いち秀吉ひでよし幕下まくげのを居ゐやちり切きり
の時秀吉ときひでよし長政ながまさと一ひと同どうく長勝ながかつらが部べい小
屋やありて一いち友秀吉ともひでよしと兄弟けいだいの約やくと
なり

秀吉ひでよし天下てんか一統いつとうの時長政ときながまさ京都きやうとの御目ごめ
代だいとあり江列えりつ大津おおつの城しろを居ゐりて又
坂さか本の城しろを居ゐりて一いち河内かふちの政勢せいせいを居ゐり
て一いちさき

天正十二年てんしやうじふにねん秀吉ひでよし尾列おひりつを發はつの陣じん中
の諸しよを居ゐりて一いちさき
同十二年どうじふにねん秀吉ひでよし和泉いづみ紀伊きいを征伐せいばつの
時長政ときながまさ命めいとけたまひりて一いち秀吉ひでよしと居ゐりて大
もと又また英えい流りゆう守しゆ秀吉ひでよし長孫ながまご士郎しろう秀吉ひでよし次つぎと大

将うして回國をたゞげしむ

同十四年

東照大権現と秀吉と和睦のさき長政

は流しひらして豊列濱吉らり

秀吉の妹と濱吉の娘を嫁せしめ

たまふ是らり

大権現を改こまごりとあしり

たまふ

同十五年秀吉二十万騎を引わく籠

兵を征伐のさきも改命とあはたま

りて軍事とらりぬがしり

たゞげしむ時一服後のまり

自主きゆ出流一掃をおこなは改

命して出流を納命にあしりめ

制法教を象となく秀吉服後のま

を依り内務助成政らりしむるま

國中の百段成政がかりきしり

くくして乱を起しゆ秀吉成政

なほびり国中のさあしめ
対決せしめたまふ小成改創法を
むくの長政へ命じて成政と自
教せしめ長政殿後下仰て主
民をたぐきつゝ一は後秀吉より肥
後のふとが藤清正小為川長あ人小
たもふ

同十六年、後五傳下に叙し、弾正少弼
任じ

同十七年、為授のふとを能く秀吉来
年、小糸氏を征伐し、たまふこと長
政とすのこをえりたまふ

同十八年、正月

右法院殿、海上流るりめて秀吉より
法對面ありてその目を長政がめり渡
清志くまふとす、法殿と叙す

同年三月朔日、秀吉小糸を征伐のた
めを發せり日と經く

あまのりさういさるるすそ法
軍勢をすめりく小田原へ發向し
たまふ岩付の城をせしむ時嫡子お系
太史幸長本村常陸守とくらふ又

大指現のあ辰本多中將大捕志勝平岩
自計以親吉を長元忠吉を
諸岩付の城へ發向すを政が
お多忠勝へ大目とせめ平岩親吉を
指え忠へくめるとせめく不目と城外

とせめやうら時城中より和とくふ敵を政
こまゆりて岩付の城をうけつる又
命をうけて番の城へむふとさし
さき石田三成作行守於富の場をひ
きめりこまゆりて事敷十日なりと
いふも名塚とくくたやとく
せめとす事あすけらま城中小
つと政へしはく和とくふ三成成功
のたさる事といりて政といさし

九月朔日秀吉活陽一陣ありて城
五津釣を定ふるも長政も臨一あり

同十九年奥羽南郡が老長九郎某奥
郡の軍人投る人をすねきあひめて近郡

とすもお一士長といけざらる奥羽大
一りるる在國の佐将らと割す

事つらすあるときてたけひ秀
次と大将つて蒲生飛彈守長卿握
尾常日吉晴中村孫平次一長前陣お

教向一陣を合津一りる長政を引
つり

大権現の岩子決り一陣をうせたまふ
酒先を井伴兵衛お捕お政蒲生長卿こ

おごもいひみすんで大りたふ長政
かへびり吉晴一長はめてしり

せめりて橋のうへまで進み川といふも
ちやく城門をさげらゆこの日のりる

事つらす佐将の手として首ときり

さるごとく一千羽なりうのよくのいまね九部ひらた
長政が陣なかつしきりて切直南部きりあなり
中なかつとたまらうち城をひけてらぶ
るなかつと長政ながまさをゆるしるを三日
出立いでことごとく運たいぶんら友徳将ともとくと
さるやめて中陣なかつりう海長政九部と
しなかつるを合あはいつつゆんとせしに
ひでひで長政ながまさが大将たいしやうの命めいをうけずして
九部くわとゆることと事こととごごりて長政と

志こて途中ちゆうちゆうあり九部くわと講かうせしむるの
後のち秀次ひでゆき陣じんあり長政ながまさ上洛じやうらくして九部
と物ものせしごとく南部なんぶの敵てきとす
文禄元年ぶんろくねん秀吉ひでゆき朝鮮せんしんを征伐せいばつせんあ
陣じんと肥前いぜんの名護屋なごやりりなりなふ
時とき長政ながまさかいびり石田いしだ海うみの捕とらえ成なり
増回まへ右邊みぎへの尉ゑい長威ながゐと渡海わたりうみせしめて朝鮮せんしん
軍中ぐんちゆうの事こととをのりしな先まきの法将ほふしやう
すくに朝鮮せんしんの都みやことせめやがり王子みうし

とつりこいしよといども大助の軍勢
十万余をきりて朝鮮をまうふ日
の法掇朝鮮の都を陣のら兵
糧とりくたわしゆ山浦のを
まじく陣とさる時し沉惟敬和を
ふふを政三成を威を斬りてけ
首とのげきふ秀吉もけ候りけり
なふ志つりこいども和睦いさうこのが
らす大助の軍勢目しり事候こと

とも日中の兵はつとく渡海せずさうり
より秀吉名護屋よりおめく

大段現ありびり利家におわりて秀吉
しるし朝鮮よりさうりて征伐せんとの
たまふ時法人をいげを政いさあとい
りゆり身渡海りんい國家のかりぶ
るきさうなり今日津舟とあたま
りぬ日い國のあはれあすおらうんあ
らばすんでい朝鮮とら川事あす

ありきひくひと^{けりこ}いふ迄と大い^{ひでり}く事^{あり}なり
りこ^{きこ}道^な危^き亡^るの^るなりこ^ひ秀^{あり}吉^{あり}大^{あり}り
い^なり^ま也^ま政^まが^ま座^まを^ま引^まて^ま林^ま宗^ま純^まと^まく^まる^まん
こ^まー^また^まふ^まと

大^な権^{けん}現^{げん}志^しわ^わく^く光^{くわう}と^とて^てめ^めた^たま^まし^しひ^ひ也^や政^{せい}と^と宿^{しゆく}
取^とり^りう^うう^うう^う一^{いち}日^{にち}の^の後^ご蔭^{いん}摩^まの^の梅^{ばい}
小^{せう}宮^{みやう}内^{ない}在^{ざい}清^{せい}の^の一^{いち}揆^{けい}を^をお^おう^う肥^ひ後^ごの^の園^{えん}
一^{いち}一^{いち}軌^き入^にて^て熊^{くま}本^{ほん}の^の城^{じやう}を^をと^とり^りい^いら^らう
秀^{しゆ}吉^{きち}大^{だい}小^{せう}純^{じゆん}と^とて^て信^{しん}将^{じやう}と^とい^いひ^ひあ^あり^りぬ^ぬ評^{へい}級^{きゆう}

ありて^{あり}い^いり^りく^く也^や政^{せい}の^の形^{けい}後^ごの^の案^{あん}内^{ない}者^{しや}なり^り先^{せん}
り^り道^{だう}を^を引^ひく^く事^じを^を一^{いち}一^{いち}也^や政^{せい}を^をり^りて^て
信^{しん}将^{じやう}の^の先^{せん}日^{にち}長^{ちやう}政^{せい}が^がい^いま^まし^しる^る一^{いち}日^{にち}理^りふ^ふ
一^{いち}揆^{けい}の^の虚^{きよ}實^{じつ}と^とう^うの^のか^から^らなり^り也^や政^{せい}が^が子^こ
也^や政^{せい}の^の大^{だい}将^{じやう}と^とい^いふ^ふ
大^{だい}権^{けん}現^{げん}の^の家^か長^{ちやう}も^も多^た忠^{ちゆう}勝^{しやう}と^と副^ふ也^やと^とい^いて^て後^ご
向^{むか}へ^へし^して^て也^や政^{せい}と^とい^いふ^ふ也^や馬^ばの^のこ^こも^も一^{いち}り^り
い^いり^りて^て肥^ひ後^ごと^とい^いふ^ふ也^や肺^{はい}も^も事^じと^とい^いふ^ふ也^や

ていらくもぞに梅水しめぎを講わもしくからが友
しり者いであ者あ將の軍川えをやめ長政ながまさ
命いのちじて肥後いご中ちゆうの事ことを治さ治しせし

じ
文祿四年ぶんりく為な獲とりし二倍にふたひのお増
りりて甲斐かいの國くにとたましつる長政ながまさ天下てんかの
政勢せいせいときくゆ一國いっくにを幸しあふらしつる
又また別わかりし食邑しょくいをたまらる家
慶長二年けicho、秀吉ひでよしをまひらけし一いっ時とき

を政せいとありて治ちげらばもさこたらんちりこ
名事なごの物ものをたうてこもり國家こくがを治ち
めんこそりきまらにむれは天下てんかも
りらなんちハ小國せうこくのまたり是こゝが
家取けとりなりこ是こゝ天命てんめいなり我われとくしむ
事ことなりもこを政せい治ちをしこまりて
涙なみだをながす又また秀吉ひでよしのたましはるは
百葉ひゃくえつの板いた五人ごにんの幸しあな五人ごにんのなり
相あらりて國くにを平へい安あんたうしめ

よらていまるの造物をたまり又長
政に成さしめて物々朝鮮を
陣の軍兵いまむに船りてらふ大
明勢我死するりときくはさむめく
まぎりてめん志うは十餘万の軍機營
地脚の鬼こたうて一代のそらなり
あ人我死する事と持病さすて病志
しり下仰く朝鮮に渡海し若とお
さめてゆりて百一事業なるせんが

大権現より連して板下知よきさふ海

は八月十八日秀吉豊後津の板あ人病若

のそらよりおしりて時り朝鮮より

書を馳てつげていり鳴はこ大内勢

こ大きにたたりけく大内勢敗れと目

中の軍若近日渡海して海船をり

こあ人大りしりてらふにびくおまひ事

救日軍機ことくく物物をあ人法

将小秀吉のま言なるびりて造物

のこしをわける法おのこしを
小つりあ人も又上流す救月の後石
田増回を奉るの道に威勢をたてんこ
して大石をわけてし

大権現よりししめがなは伏見権助
すき政幸長とらと一しして

大権現より属と乞ふりて三まりの
謀りまじく事なすすかきいんみし
らまじりまじまてと下こりまじらま

再年の菱よりしは三まり

大権現よりししめがなは伏見権助
やむ國家の権助をむ事なすし
しくを政と甲列小勢をたてめなす
をししこ

大権現をむししめがなは伏見権助
ししめがなは伏見権助
あつがひと上松京勝に内通して
余はししおわく謀反せし

同五年六月

大権現法將と引わく系勝征伐の事

七月、野列小山陣す時、三成

謀反のきこえりりしを

大権現法將とめ、あつめておんりり

の、し、い、ろ、の、先、奥、列、と、さ、し、と、さ、し、と

三成と謀や、海軍と暗く、長政

幸長、幕下りあり、ろ、と、め、し、て、始

り、ろ、を、改、へ、先、甲、列、よ、う、り、て

白河院殿 時、中細之 の中山道より 先、後

と、す、り、て、お、し、い、く、謀、と、さ、し、へ

幸長、我、先、陣、し、ろ、を、改、へ、と、さ、し、て

幸長、法、將、と、引、わ、く、東、海、路、より、後

向、す、り、り

大権現より、改、小、下、さ、り、し、御、書、よ

い、く

書、は、別、披、見、中、山、の、去、廿、二、日、川

と、越、ら、及、一、戦、戦、千、人、被、討、捕

翌日廿三日、波阜城を奪取一
人も不渡皆討捕し、浪を渡す
衆来りし出馬し、中納言若中山
乃お働し、自ら波津、日道津、美見
其取入し、度方衆大更、交瑞竜
寺と、波津と、城と、操と、交瑞時
秀崩一人も不渡ら、討捕し、浪を
其は、一お波津、美見と、波津、浪を、浪
部、城、美見、討捕し、浪を、浪

八月廿八日 家康判

九月十五日、英法蘭西大將、若陣と書
し、名を、けし、し、と

大権現へ、夜をす、冥ヶ、京、為、居、し、て
天下、一、く、幕、下、に、ま、す

大権現長政と、め、く、み、ま、く、し、な、す、ふ
幸、つ、く、あ、り、し、と、政、常、に

大権現と、國、基、の、た、く、ま、ま、と、か、す、と

て
ふとそいのきみくも政我とよき
まうらまけとひくうひをさうりて
具せうせたまふ
同十年も政書子を引わくはる
候す時

右徳院殿親おととなりふこと他
こくちり聖年ま、隣とて五百石は別
又城内の茶屋一におめくは茶とた

まじりひりいい宴りゆき事ひき
たびなり又

右徳院殿を政が亭に志をく
あつとくすぐくのなまのひり
ふつき事ならひたり

同十五年四月七日卒時六十六
五葉 法名功山道忠

幸長

童名長満

天正四年江列坂本の城より誕生常六

秀吉よりを侍す

同十七年四月浪五侍下より叙一

系変より侍す

同十八年秀吉小田原を攻めぬるとき

長政小督三子御膳とひさねを侍す

五月長政信濃と下知して岩付の城と

せしむるとき長長がしむるに多忠政

信介より先づらるる大目とせあ屋がり

橋のうへにおわくおたふ城申力は

まゝく長政よりはわく和をこふ御三目岩

付の城をうけざる城中の兵命をま川より

して洞室よりあつる秀吉の連の大助と威

してあ仗をたまりのつけの目脇指

をたまり御時より長長十五歳忠政十六

業なり

大権現だいけんげんありも内仗うちざいたまりて慶長けichoなる

文福ぶんぷく元年げんねん秀吉ひでよし朝鮮しんせん征伐せいばつのいざなあ肥前ひぜんの

名な権屋けんや陣じんしたるしんせん梅小肥うめこひ

後ご入いり一捨ひとすてとおす時とき秀吉ひでよしをまか

と大将たいわううののいいおおししじじあり

ままごごもも梅小うめこすすぐぐにに謀まうぢぢ海うみののままここ

名なららりりたたれれババ軍ぐん切きととややじじ秀吉ひでよし時ときり

十八業じゅうはちわざなり

同どう年ねん朝鮮しんせん征伐せいばつのの仗ざいここなるなるこのこの時とき休やす進すす

政せい宗そうをを政せいここままううききゆゆありありししきき

秀吉ひでよしううららんんううてていいづづくく渡海わたうみせん

ヒひテて一ひと日ひ

切きややじじ政宗せいそうをを長ながととたた何なにととななくく渡

海うみ一ひと福ふくねねここ念ねん山さん浦うら一ひと倉くらすす秀吉ひでよしをを長ながおお生

浦うら一ひと城しろををままびびりりくくままりりかか藤

清せい正せい一ひと日ひくく西せいのの城しろををままおおして

生せい捕ぼもも又またおおり

て黒田を改なりびり孝長を遣はし
く敵地をるめりりて彦陽に宿す蔚
山とらる事牧十里ありて大河あり河
のろふはりの見の兵士ととくあり
大明の大軍をのらにおうひありそ
りの見の兵士牧百人とらり子孫
彦陽にいら時孝長なりびり
毛利家の完戸備前守大田飛騨守
同陣中より孝長物見の兵あり

さし事をいりてまじり兵とおこ
して山ありおといても大明牧百の
軍兵たひとらげますゆいまこと
大敵をるすすすすすすすすすす
山小いんこす牧十里のる大明百の
兵と肩をたし敵とほし移る屋
る蔚山城中より事あり大
明の兵前をとりきりてことごと
めんをり時大なりたれ孝長牧

所の疵をくくり馬あつても又きり
ふくこの時龜田大陽忠敵の將とき
先ふり大明の無志づくありざり
一孝長城中より幸とあり城
まかぬ清善坊のく門とさげらぬ大
明の兵急一城外とせある屋づる孝長
完戸を回二丸本城とくめと先と
まのら時一十二月廿二日なり
同廿二日大陽の將李如梅楊登堂等

早天一書とおして大自口一陣
そ己の別は大明の法將多合して
おのく甲子とくこむ時一かぬ清正
枕張一ありて先とききていつ孝
長一討死せば我河のめんありてり
本物一うらんやえ兵十艘も五
百強とのせと殺目と強すて蔚山
一い城申力とゆと昼秋ふせき
たふ城申糧一り一かぬ屋との秋

一、まきまきく城印(出)く死命の
とさうりてその糧とさ(正)月三日
ろまきまきうて日(徳)の徳(百)路(十)里
のつらにさふ大明の将揚(綱)うらま
まきの無とふでぐ事(ひ)る(さ)して登
目(こ)みとらひく(慶)別(二)らん(こ)す
大明の(工)卒(こ)ま(と)き(て)三日の(秋)を
中(敗)を(す)日(の)朝(う)らまきの(無)こ
と(く)味(き)り(く)ら(城)中(う)り

又(無)を(牛)て大明(糧)と(救)十里(と)ひ(う)
川(首)と(ま)き(ら)の(五)千(餘)れ(ら)う(く)
孝(長)い(ぬ)せ(浦)ふ(く)り(清)心(松)張(り)
妙(つ)

同年八月(秀)吉(薨)津(の)後(十)月(日)を
の(徳)軍(勢)弱(と)
同年(冬)石(田)増(田)長(本)

大(檢)現(し)う(じ)ま(く)流(黨)を(し)び(び)五
家(と)ふ(げん)と(す)孝(長)こ(お)救(清)心

ひび〜黒田長政等七人々を
一〜

大権現〜一属を世にあらと七人

こいふまは長三年〜あふゆ〜

望年〜のま〜り〜りて伏見大坂

〜りおわ〜三〜り乾とおこらん

〜りて世とのさ〜き〜じ時なり

孝長殿圖とらるあますはのよ

大権現の平目こゆ

同五年

大権現京勝証成のあ野別小山ま

て後向あり〜小三成が諍及のき

〜りあり〜れが救日送ぬ〜なむ

法大物と軍をとらりた〜孝長

すみゆ〜りげ〜はよ〜この大名

孝く〜と〜あ〜り命〜り

あ〜ぶ〜ま〜り〜書子た〜ひよが

〜り〜り〜と〜も〜ま〜り

とゆふしびわろ魚しすい

大権現の道ときこりめしていふくち

きりとしきこりめたまふ時よ孝長

大権現の道けり徳大おのく

玉の巻をりあつてびくくせまら

井伊を敵お捕まぬ多中將お捕

忠務二人徳右の目録しり

八月廿二日徳右本宿川とこりて

波阜の城とせめんこす孝長池田

三尾藩の輝政は新お納川をこりて

波阜の兵こたはしく大り勝利と

ゆきりあ将おのく首ときり事

子解人翌日波阜とせしり孝長

一人瑞竜寺のうりおとせし是之敵

が敵人物系右藩つがまのり下たり

昂時し壁柵をひきこりり女城お

いは大目の門おりおわく物系救

百人をこりて半時むり相た

い柳原ひきありきくまき長が部
後を首ととりてこまきと敵もこの時
敵とららる事五百餘をいり書
系しりいしり

九月十四日

大権現赤坂山を御ありて明日一戦
とくくろきのひの輝政を長しり
て南宮山の大軍は陣のうらまあり
合戦の完中より無とおこさるは

陣雖後たうりこま将の明日はまきおえ
たうしこま将許する事ある事しりて南宮
山の標は陣とらる午の時にしりて関が
系一戦大小勝利とけく敵こくく敗走
大権現大津の城は入津ありてこまここ
くくゆ脹す

大権現割れと系部をびよ詔國より
たうしり池田輝政福崎正則なう
びり香長ゆよりて連署の判

とくしんしごの功業之人よりなり
なり右の軍功より甲斐の國と
ふあつ増りて紀伊とたまたま
月六年一浪四位下小叙一紀伊守
任す

日十八年八月廿五日卒
年三十八
葬 法名善翁宗云

女子

越前宰相忠昌室の世

女子

後二位大納言義重の室
寛永十四年四月逝去

長晟

少らひ者ハ岩松 大兵衛作
但馬守
幼少の時より秀吉のこころ小作り

山流を造る川是に一揆
号敷わして首領と流るる吉野
郡一少げく河川死跡を以て
このひもとを注をす長蔵すかつら
お多正純一連一これと
大徳現由感一お河一あとの一正
純状あり又紀州を四日高のあ那大
坂のりし河一少らと一揆をおん
長蔵軍中の士率二繼二千人とこら

ちほりして一揆をたけ上は小
ま一これお多正純らみ一これあ
か慶英の状あり
大坂和睦の後士率とほりして大坂の
握みくとうめく長蔵まよくり又
一揆の解黨を講す
え和元年大坂再戦の時大坂より和
泉紀伊大和の國人一金銀を以て
一揆とおこさじ長蔵四月十

八日一、泉列の佐野川に陣を佐野
大野修理亮が末地なり大野俊兼
門中村善美ひうにありのりて
佐野よりいき一捨とりよゆて長
陣をおうりんこそすこひりし
し中村とよりあり大野とよりけ
ぬ一捨退散す

同日廿九日大坂の淀より河原
大野直馬首と大将より津宿越前

守屋大守を笠物橋因右衛門
副将より泉列をおうり助松陣を
この時長晟信を陣とらる敵と云す
解所とらる因右衛門大守笠物ハ一
余路八河をそよ陣とらる櫻の井の里
水尾田大隅一巻小巻をわくはる
多助助左衛門安井長内岸九巻津
在津作が師は八本新巻松宮勝

女等十餘人屋いんをまじりて相たふ
八本新兼園古書をうりて園右
藩門にめり水に陸とありて飛をうり
あふぬ八本子の首をゆくりり多助んま
く矢とたるり龜田か回ん救十人し
く鉄炮とるり運ぶり監物大守
そゆり事ありて敗水す飛を
くあふりの救百人敵と追りり事
救所甲首十二とゆりりすりり使者

を東伏見よりけり右の首を救き
大権現使者と神ありて合戦のあ
つとつとつとゆりりありてま戦功を
感したまひの書と下らり使者も又
神馬と相伝すま書一いり

於て表及一戦敵救多取討捕
く東若以於社合神感思名也

四月晦日御黒布

淺野 他馬守との

清年書

浪大坂相働あかざのあひまわらひの付白郎ついでにしろら及一哉あひ殿せん
牧多あまの討捕うらの乗水のりみづ浪なみをを越こす
持露いりの母ははは法はふの物ものをを負おふ
成清なりきよ浪なみを清内書きようちがきのあ人ひとの仕し役やく
者清ものきよ前まへはら言ことを清感きよかん不斜ふさの信しん
收由うりゆ役者やくしやは水みづをを下くだる番ばん細寺ほそでら川がわ
橋右はしひだり清きよの官くわん市いち兵衛べゑの達たつは之これ
と様さまと

四月晦日

な多上野友

正純

板倉輝賀守

晴重

な多依渡守

正位

浪野徳馬七右衛門

右波院教みぎなべいんのしやうより七右衛門しちゑもんとたまひり役者やくしやの

たまきの七回あがりまゝの書い

えんご おおやまのやうていさひるいさきまてにえんごあま
と後拾其表吾以於働依く頸枝
多分来神妙思食山殊可勅軍忠
く事形あや

五月朔日 濟馬平

淺野但馬守

大坂没落の後

大権現二条の城より西府の時長殿上

洛す時より

大権現の修し櫓の井合戦の土率小

御對面ありるまきのの上さ取上田主

水島田大隅多胡助左衛門安井甚内

岩の巻巻と不月よりめのりせ登城

やめてお湯す上田島田よりあここ

系をけら進金銀衣服を存録す

まきより伏見よりいより

白旗院殿よりお湯す二条の儀式のこと

う

同七年七月よーのけ後下ごに叙す

同年の冬えん江戸えんより系勅えんと

大権現の由おほいじとめと嫁よめやめたまふ

同二年

大権現は不倒ふたふの時長えん後ご府ふよりきよ

すら時とき玉たま堂だうの榮入えいじゆとたまふたまふ他た元げん来らい

を政せいがわがの寶たからにして先せん年ねんをえんとす

こころなり

同五年きの紀伊きの國くにをた

て安藝あき一國いっくにをびりびりり後ごのうららを

たまふ家

同八年ちゅう加茂か肥後いご守忠しゅちゆう清きよにいりりくく江戸

浦うら珠たま天守てんしゆの土臺どだいをきりりく

寛永三年かん納言のうごんにいりりく

同九年ちゅう九月く三日み卒すつと時ときよりい七しち案あん

法名ほふ洞どう雲うん宗そう仙せん

長重

長重 采女正 後五位下

十三歳より

白河院殿の御^うつら^りり^くり^くり^り院

うら^らか

寛長二年十月一日采女正^{おん}任^ん

後五位下^{ごごいげ}り^り叙^ぎも^もの^のり

大権現の姫女^{おほい}松平^{まつだいら}平^{へい}左^さ衛^ゑ尉^{ゑう}が^がじ^じの^のめ^めと

ゆ^ゆり^りて^てこ^こき^きり^り婚^{こん}す

同六年^{おとむね}奥^{おく}列^{りやく}陣^{ぢん}の時^{とき}

白河院殿^{しらわにん}より^{より}さ^さの^のひ^ひを^をり^りて^て宇^う都^つ交^か

お^おう^う家^か

同六年

大権現^{おほい}の^の御^ご命^{めい}より^{より}修^{しゆ}く^く下^げ野^の國^{くに}真^ま実^{じつ}を

あ^あら^ら二^に万^{まん}石^{せき}地^ぢを^を領^{りやう}す

同十年

白河院殿^{しらわにん}より^{より}上^{かみ}河^かの^の時^{とき}修^{しゆ}す^すを^を後^ご侍^し

上^{かみ}河^かの^のた^たび^びこ^この^のに^に修^{しゆ}す^すを^を後^ご侍^し

同十六年 榎田土橋の石垣ありて
堀の普請とせしむ

同年長政卒す、ま率比のうら

真壁ありて、又石解となす

同十九年、大久保お控守忠隣叛逆
の時長政、江戸へ去る

大體現

台座院殿の御命をかりて、新造

小一、小田原にうつる、あ、津取

これと感義ありて、ふりりり、
城を破却して、普請をつとむ

同年大坂御陣より、修す

元和元年、大坂再乱の時、五月、首

斬り、おとす、この、く、軍功とせしむ

まして、首級、数百とせしむ、り、家人

三十、解、半、討、死、す、か、難、兵、死、す、り、
その、り、成、ゆ、り

同二年、日光の御普請とせしむ

たまつりこま後三度由善徳を
つゞ

同四年中蔵所^{ちんざう}津門内^{つもん}の地^ち於^おに
ときつく

同八年^{ちゅうはちねん}中^{ちゅう}多^た上^{じやう}改^か易^いせしむ
時^{とき}物^{もの}常^{じやう}より^{より}別^{べつ}列^{りやう}等^{とう}於^おに

の城^{じやう}と^とうけ^{うけ}せりて^て由^ゆ善^{ぜん}と^とつゞ
同^{どう}年^{ねん}右^{みぎ}河^がの城^{じやう}より^{より}左^{ひだり}あり

同^{どう}年^{ねん}右^{みぎ}河^がの城^{じやう}より^{より}左^{ひだり}あり
同^{どう}年^{ねん}右^{みぎ}河^がの城^{じやう}より^{より}左^{ひだり}あり

執事^{しやくじ}のめ

右^{みぎ}院^{いん}殿^{でん}の命^{めい}と^とは^はて^てい^いく^く汝^にが

年^{ねん}勤^{きん}仕^しせられ^れあり^りて^て常^{じやう}地^ちと^と他^た國^{こく}

あり^りたま^たまつ^{まつ}る^るを^を津^つ加^か増^{ぞう}あり^りて^て又^{また}

笠^{かさ}原^{はら}の城^{じやう}と^と別^{べつ}して^{して}真^ま壁^{かき}より^{より}指^させん

ご^ご抄^{しやう}の^の領^{りやう}地^ちに^にお^おき^きく^くなり^りぬ^ぬ

長^{ちやう}を^をあ^あへ^へり^りけ^けり^りて^て真^ま壁^{かき}の^の父^{ちち}が

墓^{むら}の^のあり^りお^おなり^り給^{たま}は^はり^りて^て笠^{かさ}原^{はら}の

城^{じやう}より^{より}真^ま壁^{かき}を^をく^くり^りて^てたま^たまつ^{まつ}る^るを

うつてお増れつみのうみみなれなしし也
しひしけけまますするるららははひひととふふにに
達たすす

白法院殿しらいん威い美みああるるままののくく津つ前まへ

めめおおさされれ結むすままのの津つ祖そよよああららるる

寛永四年かんえい松平まつだいら下野しもちち率りつすす時とき

会津あいづの城しやうををつつままじじ

同六年どう江戸えど津城つじやうの丸まる五虎ごこの

口くち土橋つちはし石垣いしがきの普ふ徳とくををひひりり下くだすす

の堀ほり普ふ徳とくををははじじ

同九年

白法院殿しらいん荒あ津つのの時とき津つ越こ持もちりりて

銀子ぎんことと相あ飲いんと

同年

將軍しやうぐん日ひ光みつ津つ社しゃ参まのの時とき今いま市しのの法はふ

殿でんのの普ふ徳とくををははじじ

同年どうねん長なが重ちゆう病びやう一いつ切きれれ時とき永えい井い目め向むか

守まも上うへ使しりりてて事ことりりてて去こ病びやうをを

寛永四年九月三日卒を年四十五
有えびぎき
鉄山道平に是ありす

女子

小原伯耆守長房の妻

女子

堀美作守親良の妻

女子

松平越中守定綱の妻

長綱 おなが

又一節、母ハ松平玄妻元吉のすめ

寛永八年十二月三日没又位下

叙一内而路よほど

同十一年、湯上流の時江戸の湯留
守ありて和合の湯門を

ほせし

同年駿府の湯城よと妻を

同十三年、江戸の丸井善徳
とつと

同年日光浄土社の信長が

日光の浄土詣りたじくまじ

たぐまのり

同年朝鮮國の三使來朝の時

お別大儀ありしと知合無と

同十四年、よりわけし役とつと

同十七年、大坂の城番とつと

女子

浅野同播守の妻

女子

女子

女子

長治

又六郎

同播守

長晟が長男

寛永七年、後五位下に叙し、同職也

小治政

日九年、長晟卒して、後任後國

三吉、惠禎、西那、又万石と領也

光晟

長晟の嫡男 安親

長晟の嫡男

元和三年八月十二日、紀列初哥山

の撤あり、誕生母ハ

大権現の御じとあはす

白法院殿、清ら海、清使者とたまりて

家督誕生の、らと賀し、たまふ

同九年

白法院殿、清ら海の時、光晟幼少し

て、壽列、らとと海、けり、そは目え

り、清膳物、清膳物、衣服と指針を

時、九歳

寛永四年、十一歳、少く、江戸より

元服の時沖諱の光れ家紋を以て
松平の称号をたまはり位下に
叙し安藝守に任じ
同九年父長藏卒す

將軍家より召しよりの使ありて
香典の銀五千兩をたまはりて教代
の齋功を蒙りに外戚の者として
あり事とのたふ日紙を以て
家督をたまはりか

同十一年侍従に任じ位下に
叙す

同十四年二月より八月に江戸
御城殿主の御巻をきけくは時慶に
長治を不にくにまりあつらる

少輔丸に任じ
都級丸に任じ



凌野あきの

某なにか

長尾

長尾ななび列

氏次うぢつぎ

長尾

長尾ななび列

甲州郡内にて二百石と領す

氏重

内膳 生國日前

寛文三年氏重十一歳にして江戸へ越
井伊兵部が捕を政大久保相模守忠
隙よりいさしそ

白徳院殿を有しそまらりは小姓の御
なまを侍とす

同五年景勝むかしの時

白徳院殿御馬を宇都宮よかしたる時
氏重侍を暗に石田治部が捕三成上

方よおわく誅叛のしきこしめ

白徳院殿宇都宮より東山道を通り上

方よりおしきたるま時氏重幼少
ならがゆふ侍よはくはりしり
使者と

白徳院殿少をまはるか大久保相模守

忠隣 ちか 之 の 被 ひ 給 たま へりし に 出 で 立 た 立 た 判 はん の 出 で 書 しよ と
た た ま ま の 御 ご 用 よう 又 また 使 し 者 しや と 大 だい 坂 さか 小 こ 之 の 御 ご 用 よう
は 出 で 立 た 立 た 判 はん の 出 で 書 しよ と た た ま ま の 御 ご 用 よう

氏吉 うぢきち

檢 けん 之 の 助 すけ 生 な 國 くに 氏 うぢ 判 はん

米 こめ 地 ぢ 二 に 千 せん 石 しやく と 右 みぎ 領 りやう と

家 いへ 紋 もん 丸 まる 内 うち 鷹 たか 羽 はね 二 に

